

ウナギ減少の大きな要因は、①海洋環境の変化、②過剰な漁獲、③成育場の環境変化とされています。その中で成育場の喪失が特に問題です。

堰や水門によってウナギの遡上・降下が妨げられるようになり、川の護岸工事でウナギのすみが失われ、用水路工事で田んぼが川と切り離され、田んぼ周辺での成育ができなくなりました。

高度経済成長期以降、日本の河川には河口堰やダム、砂防ダムなど多くの河川横断工作物が建設され、河川の上流と下流、海と川のつながりが失われました。シラスウナギが遡上でき、「クロコ」となって流域全体の河川・湖沼に生息し、成魚となって海に帰れるような水環境が回復されないと、ウナギの再生はありません。

どうしたらウナギが戻ってくるの？

利根川河口堰・常陸川水門の改善を

ウナギの遡上・降下に大きな影響を与えているのが、最下流部にある利根川河口堰と常陸川水門です。

近年、利根川流域の水道

用水・工業用水の需要は減少の一途をたどり、水余りが進んでいます。もともと水資源開発のためにつくられた利根川河口堰や、霞ヶ浦開発の常陸川水門はその役割の見直しが必要となっています。

そのことを踏まえて、ウナギなどの魚類が行き来できるように、これらの施設の構造や運用の改善を求めていきましょう。

利根川河口堰

1971年1月に竣工し、独立行政法人・水資源機構が管理しています。

この河口堰の目的：①塩害防止 ②東京都・埼玉県の水道用水、千葉県の水産・工業・農業用水の開発

霞ヶ浦・常陸川水門

1963年5月に竣工し、国土交通省が管理しています。

この水門の目的：①塩害防止 ②洪水防止 ③霞ヶ浦開発事業(1996年3月竣工)の目的を補完
霞ヶ浦開発事業の目的：湖水位を操作して茨城・千葉県の工業用水、茨城・千葉県・東京都の水道用水、茨城・千葉県の農業用水の開発

利根川流域市民委員会

利根川ではダム建設等の大規模開発事業が次々と行われ、かけがえのない自然が失われてきました。

- ①今なお進行中の大規模開発事業にストップをかける。
- ②過去の開発事業を見直して、かつての利根川の豊かな自然をできるだけ取り戻す。
- ③利根川流域住民の治水安全度を真に高める施策を実現させる。

以上を活動目標として、2006年7月に利根川流域市民委員会が発足しました。

利根川の未来を考えるカムバック・ウナギ・プロジェクト

利根川においてウナギが生息できる環境を取り戻すため、

流域住民が改善方法をまとめ、その実施を行政に働きかけていきます。

連絡先

利根川流域市民委員会事務局

深澤洋子 電話& FAX 042-341-7524 080-5372-4084 E-mail bbjaga@jcom.home.ne.jp

利根川をウナギがすみやすい川にしよう！

ニホンウナギは絶滅危惧種です

利根川には、上流部に数多くのダムがあり、中流部には取水堰、下流部には河口堰などがあり、ウナギ、アユ、サケなどのさまざまな水生生物の生息に大きな影響を与えています。

鰻

ウナギの一種、ニホンウナギ(学名 *Anguilla japonica*) は現在、急激に減少しています。

日本のウナギの漁獲量は1960年代には年間3000トン前後ありましたが、2015年にはわずか70トンにまで減少しました。2013年に環境省がニホンウナギを絶滅危惧種に指定し、2014年にはIUCN(国際自然保護連合)が絶滅危惧種に指定しました。



矢木沢ダム(上流部)

出典：(独)水資源機構のHP



利根大堰(中流部)

出典：(独)水資源機構のHP



利根川河口堰と常陸川水門

出典：国土交通省のHP

【利根川】

利根川は、流域面積16,840km²、全長322kmの日本最大級の河川です。その源は群馬県みなかみ町の大水上山(標高1,831m)で、関東1都5県の流域の水を集めて千葉県銚子市において太平洋に注ぎます。

河口から18.5km上流に建設された河口堰や常陸川水門によって川と海のつながりが分断されています。

【利根川河口堰、常陸川水門(霞ヶ浦の出口)】

これらの堰・水門には魚道が設置されていますが、その幅は数mのごく狭いものですので、魚道だけでは魚類は十分に上り下りを行うことができません。

魚類が行き来できるように堰・水門のゲートの操作などを見直す必要があります。とりわけ、常陸川水門はゲートの閉鎖時間が非常に長く、川と海を分断しています。

上の航空写真では見えないほどの狭い部分が魚道(赤色四角枠内)です。

